

---

# 儀式の夜

白亜零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

儀式の夜

### 【Nコード】

N8089X

### 【作者名】

白亜零

### 【あらすじ】

ある高校に通っている、女子高生の黒輝禮夜。いつもの様に退屈な日々を過ごしていた。

しかし、ある日を境にして起きる殺人事件。これからどうなってしまうのか…

## 01（前書き）

初めまして。

初めて書く小説なので、誤字なども多いかもしれませんが、読んでくれると幸いです。

予定が狂わない限り、土曜日に更新します。

曇っていた。

今にも雨が降り出しそうな梅雨空を黒輝<sup>くろきゆきや</sup>禮夜は眺めていた。名前でよく勘違いされるが、一応女だ。

正直言つて、つまらない。何もかも。高校生活も思ったより楽しくなかった。今行っている授業の物理は特におもしろくない。

この先生の授業は長いし同じことを何回も繰り返して説明する。しかも生徒いじめをすることで校内の生徒の中で有名だ。かなりたちの悪い奴と言える。

こいつの名前は悪谷<sup>あくたに</sup>。勿論、生徒たちには嫌われている。

正直言つて、眠い。今すぐにでも眠れる。

でも、こいつの授業じゃ眠れない。理由は…

「おい！そこで寝ているのはだれだ！河崎か！河崎、お前この問題解いてみる！」

「え！えつ…と…」

…まあこういうことになるからだ。ちなみに河崎のフルネームは河崎<sup>わさき</sup>伸太である。

「もう、いい！後で職員室に來い！！じゃあ黒輝、お前答えてみる！」

こつちに矛先が回ってきた。ぼけーつとしていたからだだろうか。とりあえず立つ。しかし問題なんて聞いて無い。黒板にも書いていない。どうやら悪谷が消いたらしい。この野郎。

禮夜は心の中で悪谷に悪態をついた。しかし今はそれどころではな

い。こいつの問題には答えないと評定を下げられるのだ。そのため問題には答えないとやばい。でも聞いて無かったから答えられない。この場合はどうすればよいのだろう？

不意に目の前がブラックアウトする。でも一瞬のことだった。

「…正解だ。座つてよし。」

心底悔しそうにしながら次のページに入る。周りの生徒のささやかな歓声が聞こえる。

何が起こったのか意味が分からないものの、言われたとおりに座る。結局その授業で謎が解けることは無かった。

待ちに待った放課後。いつもならもっと喜べるはずなのになんとなく喜べない。テンションがいつも上がらない。

「ちょっと禮夜、さっきの授業のときすごかったね。かつこよかったよ。」

そう話しかけてきたのは長瀬由梨<sup>ながせゆり</sup>だった。さっき…つまり意識が無くなった時の授業だろう。

「ごめん、由梨。ボクその時のこと覚えてないんだ。というかあの時にボクは何をしたの？」

「はあ？あんた覚えてないの？信じられない。本当に何も？あんた私をはめようとしてる訳じゃないよね？」

「うん。というかどれだけ疑うのさ。」

禮夜がそういうと、由梨は溜息をつきながら簡単に話し始めた。

「そりや疑うよ。…まあいつか。教えてあげる。本当信じられないよ、禮夜、あんた悪谷に当てられたでしょ？最初はあんた戸惑ってたみたいに見えたんだけど、途中から…何て言うのかな…そう、急に自信满满になった感じっていうか…まあそこはいいや。その後、その消された問題の答えを言ったんだけど…その問題が大学生レベルの問題だったらいいんだよね。だからみんなおーって感じで…まあそんなところ。」

「つまりボクが大学生レベルの問題をあの授業で答えたと。」

「簡潔に言うとな…てか私がかんばって言ったことをそんな簡単にまとめないでほしいんだけど？なんかみじめでしょ。あ、それとね、今ほかの学校の女の子が行方不明らしくて……」

由梨の言葉を無視する。別にまとめようがまとめ無かろうが由梨に関係する事じゃない。それにそんなことは、まったくもって問題じゃない。

問題なのは意識が無い間にあの問題を解いたこと、そしてその記憶が全くないこと。これはどういうことなのだろうか？

しかしどうせ禮夜にとっては得となることだったのだから、別にそこまで気にすることでもない。

「まあ、いつかあ。」

「全然良くない!!」

「何が？」

「全て！」

由梨が勝手に怒っているのを禮夜は眺めていた。何がしたいのだろうか？怒ることによって、何が変わるのだろうか？

禮夜は思考を止めると荷物をまとめて立ち上がった。それに合わせて黒く長い髪の毛がかるく揺れる。

「禮夜？あんた何してんの？」

「帰る。」

「はあ！？あんた何勝手に帰ろうとしてんの！？」

またしても由梨を無視して廊下に出る。昇降口まで響いていた由梨の声は聞かなかったことにしておいた。

禮夜は家に帰る道を歩いていた。禮夜の家はこの辺ではめずらしい和風の家である。何でも昔はこのあたりの大地主だったらしい。しかし、それも昔の話だ。

「ただいま。」

返事は無い。当たり前だろう。

両親はある事件に巻き込まれ、七年前に他界し、ここまで育てくれた祖父も去年他界した。

そのためこの家には禮夜一人しか住んでいない。

…一人と言うのとは違うが。一応何人かの使用人が住んでいる。し

かし今は休養をとらせている。

今日は何もかもがめんどくさい。すぐに部屋に戻り、着替え、布団に入った。

結局あの授業の時に何が起きたのだろうか。

思考を始めるがすぐに中断する。

眠い。

そこから禮夜の記憶は無くなった。



## 02（前書き）

現実逃避をするために投稿しました。

次の土曜日にも多分更新すると思います。

ふと気がつくと、部屋の中が明るかった。いつの間にか眠ってしまったらしい。

時計を見ると六時三十分、朝が苦手な禮夜にしては早い。もうひと眠りしようと思ったが、完全に目が冴えてしまっていて、眠れない。音楽でも聞いて時間を潰そうかと思ったが、充電が切れていた。昨日充電をするのを忘れていた。

しょうがなくテレビを見ていたが、面白い番組は無かった。

時計を見る。今は七時。さっきから三十分しか経っていない。

仕方がないので、ジャージからセーラー服に着替え、学校の用意をし、家を出た。

外は明るかった。

禮夜はあてもなく外を歩いてみる。

「何で一人の時にこんなに早く目が覚めるんだよ……今日は八時くらいに起きるつもりだったのに。」

禮夜は朝に弱い。そのため七時半以降に起きるのは、最早日課となっている。

なんとなく歩いていると、いつのまにか、学校の裏山に来ていた。高校に裏山があるというのも変な話だが。

いつもは見ているだけだったが、今日はちょっと探検しようと思つて中に入った。

裏山に広がっている森林は思っていたよりも広く、まるで何かを追悼しているような感じだった。膨大な数の何かを。

森林を進むと、奥に洞窟があった。覗いてみると、大人が五、六人くらいは入れそうだった。何故こんなところに洞窟があるのだろうか？何かに使ったのだろうか？

そういえばこの辺は戦争の時の防空壕がどこに残っていると噂で聞いたことがある。その残骸なのだろうか？

まさかこの山自体が戦争の産物だというのだろうか？

もしも思っている通りだったらこの学校は何故こんなところに建てられたのだろうか？

不意に後ろから物音がする。

驚いて振り向くが、そこには何もいなかった。探りたい気持ちもあったが、ちょうど登校の時間になってしまっている。

少し恨めしく思いながらも禮夜は裏山を後にした。

登校して数分後、河崎が話しかけてきた。

「ちょっと今時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃあちよつと来い。」

何だろうと思いつながら河崎についていった。

しかし、ついていく最中、何故だか不穏な空気がした。何か悪いことが起きる…そう直感したのだ。理屈は無い。ただの思い違い、そう思いたかった。

考え事をしながら歩いていると、河崎の歩みが止まった。そこは、裏山の前だった。

「お前、朝ここにいただろ。」

何故河崎がそのことを知っているのかは分からないが、不審に思いながらも質問に答える。

「いたけど。」

「じゃあその近辺に洞窟があったか？」

「あつたけど。それが……」

どうかしたのか？と続けようとした時、いきなり河崎に殴られる。口の中で血の味がする。殴られたときに切ってしまったらしい。

「何だよ、いきなり……」

河崎はこつちを睨みながら言った。

「ここにくんな。」

「は？」

「ここはお前が来ていい場所じゃねえんだよ！」

河崎は「いいか、絶対近づくんじゃねえよ。」と言いながら帰って行った。

禮夜はさっき見たものを思い出しながら、河崎のさっきまでいた場

所を見ていた。

禮夜は時計を見る。

授業開始まであと五分。今から行かないと間に合わないだろう。しかし、禮夜は時間という概念に縛られることはない。

禮夜はためらわず、裏山に入った。

### 03（前書き）

このところ、朝寒いですね。布団から出たくなりません。

朝に行った洞窟まで行く。さっきと同じ道…一本しかない道を通る。この道を外れれば、ここから出るのは至難の業となるだろう。

朝に來た洞窟につく。洞窟の後ろからは同じように物音がする。何かが動いている音だった。人間でなければいいのだが。

しかし禮夜の嫌な予想は對外当たってしまう。今回もその通りだった。

物音のした場所、そこには制服を着た女子生徒がいた。と言っても鎖で身体を地面に繋がれていて、目と口には布が巻かれているが。禮夜は素早く布を外す。

「ちょっとじつとしていて。」

禮夜は制服を漁る。スカートのポケットに、小刀が入っていた。禮夜はそれを取り出すと、日本刀のように使って、鎖を切ってしまった。普通、小刀で鎖は切れない。でも禮夜は剣の達人である。小刀で鎖を切ることなど簡単だ。

女生徒を解放する。ブレザー型の制服。禮夜の通っている高校の生徒ではないらしい。

「キミ、名前は？」

女生徒は泣いているので答えようとしない。ここで禮夜は質問を変えろ。

「一人で歩ける？」

この質問には泣きながらだが首を縦に振り、立ち上がる。

裏山を出て少女を警察署に預ける。親がすぐに迎えにくるらしい。

警察からの質問は適当に理由をつけて切り上げた。

警察署から出た時には、すでに二時間目の授業が始まっていた。学校に向かいながら考える。

禮夜の直感は当たってしまった。しかし、これだけで終わるとは限らないのだ。もしかしたら何か重大な事件が起こるかもしれない。

しかし禮夜には止める力がない。今はそれが起きないことを祈るばかりなのだ。

そんな風に思いながらも学校へと向かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8089x/>

---

儀式の夜

2011年10月29日15時14分発行